



遙かなるパイプの煙

日本経済新聞 上席執行役員論説主幹
岡部直明

森永貞一郎日銀総裁はパイプがよく似合った。記者会見でも質問に一呼吸置いてパイプに火をつけてから話し始める。それも百円ライターである。風貌は映画評論家の故淀川長治氏そのものだが、パイプをくゆらせ、小首をかしげて語る様は、親しみがあり、かつ重厚でもあった。

総裁の影響力は絶大だった。その証拠に日銀記者クラブでは一時パイプがはやった。若輩の私までがパイプ党を気取った。さまにならないこと、はなはだしかったはずだ。パイプが似合ったのは時事通信キャップの藤原作弥氏（後の日銀副総裁）だけだった。しかし、いま思うと、みんなあのパイプの煙に巻かれていたのではなかったか。

ちょうど30年前、日銀担当になった時のカルチャー・ショックは大きかった。直前まで担当していたのは財界だった。土光敏夫、桜田武、木川田一隆氏ら個性豊かな財界人たちが取材対象だった。新たな取材先の日銀マンたちは最初はだれに会っても同じ人にみえた。七・三にはっきりと髪を分け、金縁のめがねをかけている。そのうち私もめがねは金縁にしたのだが。

そんな日銀で異彩を放っていた

人物がいる。三重野康総務部長は、初めてあいさつした日の夜回り取材でもう名前を覚えていた。政治家のような記憶力と思ったものだ。安宅産業の経営危機では、営業局長室を出て総務課長席にどっかと座り、陣頭指揮を執っていた。後の「平成の鬼平」らしい風格が備わっていた。

速水優外国局長のハイライトは国際通貨基金（IMF）の一般借り入れ取り決め（GAB）発動による英国支援だったのではないか。深夜の記者会見に、ちょうネクタイの正装でさっそうと現れたのを思い出す。あるパーティーのあと駆けつけたのだが、晴れ姿が翌日の新聞の一面を飾った。経済危機下の日銀苦闘の時代を総裁として担うことになるとは及びもつかなかった。

当時、金融政策の取材は単純かということ、そうでもなかった。日銀幹部だけの取材ではかならずしも十分ではなかった。とりわけ利下げ局面では政治家だけでなく、大蔵省銀行局長や郵政省貯金局長らがキーパーソンだったこともある。貯金局長が首を縦に振らなければ、預貯金金利の引き下げができず、従って公定歩合も動かせないこともあった。そんなとき、パ

イプ党の森永総裁にさえ、余裕がみられなくなった。いまでは考えられないことだが、それも規制金利時代の反映だったのだろう。

最高の政策決定機関である政策委員会は「眠れるボード」といわれた。会社でいえば、肝心の取締役会が形骸化していたことになる。ほとんどの政策決定は全会一致で、反対票が出れば、それ自体がけっこうニュースになった。政策委の議論もみえてこなかったし、議論の中身にもあまり関心がもたれなかった。

日銀法改正で、日銀の政策決定はずいぶんすっきりした。政策委員会は最高の政策決定機関として機能し、議論はほとんどガラス張りになったといっている。いまの日銀の政策決定は米連邦準備理事会（FRB）や欧州中央銀行（ECB）に比べても、ずっと透明だといえる。

日本の金融政策は量的緩和という未踏の領域を続けているが、「開かれた日銀」という点では大きく前進した。パイプの煙の時代は遠くなった。ややゆとりが失われた気がしないでもないが、少なくとも記者たちが30年前のように煙に巻かれることはなくなったと信じたい。